

帰郷

思い出したようにふんわりと舞い落ちる
そんな並木の枯葉の上には
ひっそりとうずくまる微笑の小人

背中に響いてくるグラウンドの遠い歓声は
見上げる雲の中へ吸い込まれてゆき
哀しい温もりとして陽光と共に降り注ぐ

細くしなやかな手が私を引いてゆく
その優しい、そして冷んやりとした肌触りは
瞬間の慰めと永遠の寂寥を暗示する

「行きましょう、風の吹く方へ、後悔の歩む方へ
貴方の心の奥深くに語りかける永遠の秋へ」
彼女の手はますますに哀切に優しく

思い出したようにふんわりと舞い落ちた
波木の枝から黄色の枯葉が
そこからひらりと飛び出したひとりの少年

私の足下を駆け抜けてゆく、喜びに満ちて
思わず振り向いた私は見た
少年を抱き上げる父親の笑い顔を

そして少年は父親の手に引かれてゆく
無邪気に、時折駆け出したりして
哀切な心を包み込む木々を振り向きもせず

見とれる私の耳元に優しい声はささやいた
「戻ってはなりません、凡俗な人間の中へなど
心を干からびさせる生活という砂漠へなど」

その時私は優しい手を放した
彼女は思わず自分の不覚に蒼ざめた
口にしてはならぬ一語を言ってしまった不覚に・・・

生活、ああ、生活よ、忘れ去った言葉

陶酔が何だ、所詮は閉ざされた部屋よ
御前の慰めなどは甘美な色をした鎖だ

戻ろう、僕は生そのものでありたい
見るだけでは、感じるだけでは 死ぬだけだ
戻ろう

(1982.11.12)